



開祖忌法要の後に
仙台杜都道院で



7月1日より修練再開しました

3月1日から6月30日までの4ヶ月間も
の長い間の修練休止でしたが、何とか再開
することが出来ました。大変ご迷惑をお掛
けしました。

再開と言えども、今のところ従来の修練
状態に戻ることは出来ません。暫くの間は
物足りないとは思いますが、少しずつ指導
に工夫を加え充実した修練としたいと考え

ておりますのでご協力をお願い致します。

開祖忌法要

本来、5月初旬に行うべき行事である
『開祖忌法要』を、コロナからの再開初日(仙
台杜都は7月1日、塩竈は2日)に開催し
ました。それぞれの道院が再開初日とい
うことで拳士全員とは成りませんでした
集まった拳士で厳かに執り行うことが出来
ました。参加いただいた皆さん、ありがとう
ございました。

この時、古澤助士の誕生日(83歳)であ
ることが分かり、塩竈道院では開祖忌法要
を執り行った後に誕生日祝いを急遽開催し
ました。今後共、古澤助士が元気で修練が
継続できますようお祈り致します。

宗昴馬代表コラム

【走り続ける】7月1日

去る5月25日、新型

コロナウイルスの感染拡大を受けての緊急事態
宣言終了、その後、外
出自粛の段階的緩和の

目安が4段階のステップで提示され、6月
19日以降は全国を対象に都道府県をまた
ぐ移動の自粛が解除されました。



2019.12.11 修練の後のなわとび 仙台杜都道院の拳士で



しかしながら、ここ数日、東京都では新
規感染者が50人を超える日が続いており
もしかしたら一日あたり100人の壁を再
度超えてしまいそうな予感がして、私は不
安を隠せません。8月1日をめどに通常の
生活が戻ってくるなどは、誰もが想像で
きないのではないのでしょうか。

今後の予定

- ◎ 7月25日(土)16:00から18:00 有段者会(塩竈道院専有道場研修室)
- ◎ 7月26日(日)09:30から 宮城県連昇格考試(青葉体育館)
- ◎ 8月10日(月)から15日(土) 道院夏休み(塩竈道院・仙台杜都道院 修練休み)
- ◎ 8月22日(土) 有段者会(塩竈道院専有道場研修室)

そうは言っても、時間は無情に過ぎていくものであり、いかに先の見えない苦しい状況であっても、生きていく歩みは止められません。それどころか、この災禍によって人々の生活が変わり、まだ先にあつた未来が「今」と引き寄せられた感すらあります。ぐつと時間軸が縮んだとするならば、相対的に私たちは駆け足のようなスピードで歩んでいかねばならないのかもしれない。

そのような中であつて、私たちの歩みの原動力とは何だろうか、ということを考えてみたいと思います。

時代や時間軸を見据えた歩みというのはスケールの大きな話ですが、分解すれば、それらも一日一日の一步の積み重ねにほかなりません。皆さんは、日々の営みの中に今日の一步を踏み出す原動力を感じながら過ごせているでしょうか。

何も難しいことはありません。日々の生活の中で行われることに、しつかりと心を込めること。それによって、周りの人たちが喜んでくれて、「ありがとう」という言葉が返ってくる。このキャッチボールが心に元気をもたらし、今日の一步を踏み出す原動力となるということです。

マイペースでいいので、このキャッチボールを上手く続けることができれば、人の精神力はそんなに簡単に尽きることはないと思つていきます。

私たちの言う「自他共楽」は、ただ人や何かに奉仕することだけを説いているわけではありません。そのことによって「共に楽しむ」状態を目指しています。日々の営みは誰かの喜びであり、そのことが自らの喜びになる。ささやかでも、このキャッチボールを繰り返しながら、少しずつ力を溜め、確実に一步を刻んでいきましょう。

困難な時代を駆け抜ける歩みの一步は、今日の一步なのです。引き続き、目の前にある生活を大切にしていきたいでしょう。



2020.07.02 開祖忌法要の後に 古澤助士と

中国古典 紹介

「学びて然る後に足らざるを知り、教えて

然る後に困しむを知る」を掲載 『礼記』

「学びて然る後に足らざるを知る」：学ぶことによつて自分に不足しているものがわかつてくる。だから、学ぶことには終局はない。

「教えて然る後に困しむを知る」：これは教える立場に立った人でないと、理解できない面があるかもしれない。ふつう、人から学ぶよりも、人に教える方が二倍も三倍もの労力を必要とする。人に対してまちがったことを教えるわけにはいかなから、時間をかけて勉強もし、準備もする。それでも十分だということはありえない。たえず自分の未熟さを思いしらされる羽目になる。

それが、ここに言う「困しむ」に他ならない。だから、その「困しむ」をバネにして、いっそう勉強に励まざるをえないということになる。

つまり、このことばは、「足らざるを知る」ことも「困しむを知る」ことも、自分を向上させる動機になることを語っているのだ。